

日本災害看護学会第 27 回年次大会 災害看護ケアの質向上委員会 委員会企画

テーマ：災害看護を問い直すー支援をうけた被災者の視点からー

今年には阪神・淡路大震災から 30 年を迎え、災害看護のさらなる発展と、その本質の見直しが求められている。災害看護ケアの質向上委員会では、ケアの内容や提供体制の検討を通じて、災害時における看護の質を高める取り組みが続けられている。

災害時の看護は、被災し傷ついた多様な人々を対象とするため、ケアの質をどのように評価するかについては、いまだ明確な基準がない。災害時のケアの質の究極の評価者はケアの受け手である被災者や被災地の救援者の声であると考え、そうした方々の声に真摯に耳を傾けることが、災害看護の本質を見つめ直す第一歩になると考えた。そこで今回は、能登半島地震の被災者の視点から支援の内容や支援者への思いを伺い、災害看護の質や評価について考える機会として、本講演会を企画した。講師には、自身も被災者でありながら住民支援に尽力されている、珠洲市健康増進センターの奥佐千恵氏をお迎えした。

奥佐氏は、全国から寄せられた支援に対して深い感謝の気持ちを述べられ、一方で、震災直後には支援が届かず、地域の人々が工夫を重ねながら命をつないだ厳しい避難生活の様子も語られた。その中で、災害支援ナースによる 24 時間体制の避難所での看護活動など、過去の災害からの知見を活かした成果も多く紹介され、健康と生活を支える看護の素晴らしさを実感された。しかし、災害対応の多様な専門家や支援組織・支援者の活動の中には、被災者の声を封じてしまうような言動、医療や看護が見落とされた健康被害も見られたこともあった。具体的には、調査目的だけの活動、被災者の気持ちに寄り添わない発言、教科書通りの災害サイクルに当てはめようとする対応などがその例である。「被災者だから感謝しなければ」「これくらいは我慢しなければ」といった思いを抱かせてしまう支援が実際にあったことを率直に教えてくださった。

講演終了後には多くの参加者から奥佐氏に対して質問があった。「支援者としてやりっぱなしだったことが気になっていた」「被災者のありのままの声を聞けてとても参考になった」「これまでいろんな災害支援に携わってきたが、本当にこれでよかったのだろうか？もっと何かできなかったのか？という長年の疑問に向き合うことができた」などの感想が聞かれた。

今回の企画は時宜を得たものであり、支援の受け手の生の声を率直に聞くことの大切さを実感した。私たちの支援が本当に被災者の尊厳と人権を守るものであるのか、確かめ続けることや、この支援は被災者(地)にとってどのように受けとめられるのか常に想像し、内省する姿勢を持ち続けることの重要性を改めて強く認識した。

多くの皆さまにご参加いただき感謝申し上げます。

委員会メンバー：渡邊智恵 内木美恵 百田武司 寺田英子 藤井知美

